



鎮守の森だより

NPO 法人社叢学会ニュース
第3号
2003年5月20日

総会・大会開催迫る

5月24日・25日 國學院大学渋谷キャンパスで

5月24日(土)・25日(日)に國學院大学渋谷キャンパスで開催される今年の年次総会・大会の概要が下記の通り決まりました。参加希望者は5月20日までに事務局へ葉書(〒540-0012 大阪府中央区谷町2-2-22NSビル5階)、FAX(06-4790-0155)、メール(jim@shasou.org)でご連絡下さい。また懇親会(会費5千円)出席希望者はその旨、ご記入下さい。なお、正会員で欠席の方は必ず委任状をお送り下さい。

日	時	内 容・講 師	
1 日 目	14:00~14:30	年次総会	
	15:00~17:30	シンポジウム 「森に生きる文明をめざして」— ところのふるさと〈鎮守の森〉を考える 基調講演 上田正昭 (当学会理事長・京都大学名誉教授) パネルディスカッション パネリスト: 佐藤大七郎 (東京大学名誉教授) 進士五十八 (東京農業大学学長) 上田正昭 (京都大学名誉教授) 司会進行: 藪田稔 (京都大学名誉教授)	
	18:00~20:00	— 懇 親 会 —	
2 日 目	10:00~12:30	研究発表会 明治神宮内苑の敷地計画の特徴 鎮守の森が残した半寄生植物オオバヤドリギ 長野県伊那市における鎮守の森の形成についての考察 神社林の周辺地域に及ぼす微気象緩和作用に関する研究	発表者 下川典子・小林章 宇佐美暁一 沖益弘 本多麻衣・濱野周泰
	12:30~13:30	— 昼 食 —	
	13:30~16:30	研究発表会 稲作儀礼からみたモリ・コモリ 東京都世田谷区における社叢の分布・緑被率・敷地面積の分析 櫻井市社叢の原状と課題 大津市の鎮守の森 亀岡市鎮守の森周辺の公害と環境破壊の原状について 吹田市における歴史的緑地の現状報告とヒートアイランド現象の緩和効果について	発表者 茂木栄 斎藤裕幸・進士五十八 相田明・服部勉 栄嶋まゆみ 森川稔 宮内寛 渡辺仁

社叢調査報告

調査地 桜井市・大津市・亀岡市

＜桜井調査＞桜井市社叢の現状と課題

～市民主導型調査のプロセスと意義
栄嶋 まゆみ・吉堂 求

桜井市は奈良盆地の東南部に位置し、三輪山で知られる大神神社をはじめ、約150の神社がある。調査対象となった神社は著名な大神神社を除く87社。調査は地元の「歴史を考える会」のメンバーを中心に約30名で構成。桜井市の青年会議所や教育委員会などの協力を得て、ワークショップ形式で調査を行なった。調査は歴史的なもの、動植物的なもの約50項目を実地調査とヒアリング調査を併用した。

実地調査においては、それぞれ鎮守の森にはどのような植生があるかをリストアップし、写真パネルを使って実際にチェック。冬季の調査だったため、大きな樹木は幹や落葉で判断できたが、低木や草花については花の時期、実の時期などの写真パネルを用意し、四季折々の森の姿を想像しながら調査。

ヒアリング調査は、鎮守の森と地域との関わりや祭神・祭事、歴史的なことを氏子総代や宮司さんをはじめ神職の方から聞き取った。

調査結果は桜井市商工観光課の意向により、観光に生かせる鎮守の森ルートマップ的なものを作成する。調査に参加した人からは、今後も四季折々の森の姿を観察する活動を続けたいという意見が多く「鎮守の森を見に行こう会」なるものを結成。

＜大津調査＞大津の鎮守の森～悉皆調査から

森川 稔

鎮守の森は地域の核としての存在価値がある。その森を見直すということは、自分たちの住んでいる地域を見直すということになるのではないかと、という観点から調査を開始。

調査にあたっては、実地も含め研修会を2回行い、実際の調査に関わった人は社叢学会会員を中心に市民や学生46名。坂本地区の調査においては「坂本歩き隊」のメンバー約20名が参加。調査対象は大津市内の神社131社。調査項目は森の植生や神事・祭神など約50項目。植生および民俗の分野では、それぞれの専門家に参加していただき非常に心強かった。現地調査においては、植生を中心とした

森の状況や神社空間としてどのような建造物があるなどを調査。ヒアリング調査は宮司さんや氏子代表に神社の歴史や年中行事、地域との関係などについて聞き取り調査を行なった。

調査の結果として、森の分布と立地特性についていえば、琵琶湖とそれを取りまく山との間に森が分布しているが、市街地には森といえるものがほとんどなかった。植生としては、大津市は照葉樹林帯であるが、三井寺や石山寺周辺には顕著に残っているが、それ以外は鎮守の森にわずかに残っていることが判った。今後は、さらにヒアリング調査を続け、公開報告会などを設け、鎮守の森の保全を市民参加で取り組みたい。

＜亀岡支部＞亀岡の「鎮守の森」調査結果から
桂 数毘詰・宮内 寛

亀岡市における調査は、調査対象となった104社の神主が中心となり、それぞれの神社の氏子総代を加え、そこに植物学・民俗学・郷土史研究家などに参画してもらい調査を行なった。

調査項目は森の立地条件から水源・森の状況・ご神木・動物・植物の種類・祭事・祭神など57項目。調査項目の「森の風景と印象」については、約71%の森が集落地や山麓などに位置していて、その存在がよくわかるという調査結果が出た。これは森が健在であることを示している。また、「森の手入れの状態」については、よく手入れができていたが約50%であった。森の状況はほぼよいようだが、「森周辺の開発等による公害」については、地下水が低下した、騒音がひどくなった、森にゴミや残土等の不法投棄があった、景観が悪化した、風紀が悪化したなどの社会問題となる調査結果が出た。

祭神について「神のタイプ」という項目で列举された神を系統的に分類すると、八幡系の神が圧倒的に多く、次いで稲荷系の神。この二系統の神が多いのは全国的なものであるが、その次に出雲系の神とヤマト朝廷系の神が多いのは亀岡の位置が日本海と瀬戸内海の間にあるため、それぞれの影響を受けた表われといえる。

亀岡支部においては、今後も森の植生を中心に、抽出調査を行なってゆく。

次回予告（第6回関西定例研究会）

日時：2003年7月26日（土） 14:00～17:00

場所：伏見稲荷大社儀式殿（京都市伏見区稲荷 TEL075-461-7331）

テーマ：ニソの森と森神信仰

講師：金田 久璋 氏（敦賀短期大学非常勤講師・福井県文化財保護審議委員会委員）

「社 叢」 雑 感

講 師 佐藤 大七郎
(東京大学名誉教授)

人生の中の森、林、樹木、木

社叢学会関東支部定例研究会へ、隠居の立場で参加していたものの討論を聞いているうちに引き込まれてしまった。面白い話は、夢中になり引き込まれるものである。そして発言したくなる、発言したことが今日の席に立つきっかけになったと感じている。

本来は、森林や樹木の「生産、蓄積」に関する仕事をしてきたが、森林の物質生産量の把握という関連から(財)自然環境研究センター(元野生生物研究センター)にかかわってきた。第二次世界大戦終了後、日本に帰国したが韓国に住んでいた頃から宗教に関連する大規模建築に対してある種の過敏な反応があった。帰国後、日本の風土の中で森林や樹木を相手に仕事をしているうちに、このアレルギー症状も和らいでいくことを感じた。

日本の風土と社叢

「社叢」という言葉から抱かれるイメージには多様なものがある。しかし一般的にはあまりよく知られていない言葉である。『広辞苑』を調べると「神社の森」ときわめて明瞭な説明がある。社叢は堅苦しく一般の人々には親しみにくく感じられるが、日本人の根源にあるともいえる宗教精神を表す言葉としての意義がある。

もともと日本の神々は八百万の神というように広く捉えた表現がされ、日本人はあらゆるものに神の存在をみている。仰々しく形にとらわれることと難しい言葉が嫌いで、不信心を標榜してきた。しかし日本の宗教と60点寛容主義という人生訓との結びつきを見つけることで、その気軽な神のあり方から宗教に対する見方が変化した。

宗教は風土との結びつきが非常に強い。その土地の作法を守るということは、神々すなわち風土を形成する自然に対する畏敬の気持ちが大いに含まれている。その土地の神社へ参拝する者に対する礼儀としての慣わしに似た感情を強く感じる。調査で地

方を訪れた際に実体験として感じ取ることができた。

社叢と人のかかわり

森林生態系という視点から社叢をみると、人間がシステムを支配していない空間であり、自然の掟に従ってゆっくり遷移していった空間であることが分かる。

自然の仕組みを尊重した持続可能な資源の利用は、そもそも農業社会や林業社会では基本としていたところであった。しかし戦後の生活様式の変革により、自給自足の暮らしから社会経済資本に頼った社会生活へと変化した。このことは農村風景を大きく変化させることにもなってしまった。人口が増え、それによって土地利用範囲が広がり奥山まで切り取られてしまったのである。さらにそれまでに鋤、鋤などで行われていた作業が機械化されるなど人間が外で行う作業はすっかり変わってしまった。

社叢の将来像

社叢は奥山の名残つまり、原生林・天然林の様相をもっているところが多い。「花のほかには松ばかり」という言葉があるが、人間が踏み込んでしまった場所の林は、荒れている場合が多く、日本の歴史の中でそれが風景として定着してきた。社叢は奥山そのものというわけではないが、動物や鳥類、昆虫類などを含め守られてきた空間である。ここが里山の思想と異なるところで、里山の二次林は人間による地力の収奪、また常に人間が介在していることによって成立しているものである。

人が社叢に入ることによって問題となることは、無意識のうちに土地が踏み固められるということと、安易に低価格の林木を植林することや、カヤなどの植林を意識的に行ってしまうことである。これは、森林生態学的に危険な事で、この事を理解している氏子が意外と少ないのが現状であり、懸念する点である。

(文責：本多 麻衣)

次回予告(第6回関東定例研究会)

日 時：2003年7月12日(土) 14:00~16:30

場 所：明治神宮

テーマ：明治神宮の森にふれる

講 師：奥富 清(東京農工大学名誉教授)・濱野 周泰(東京農業大学助教授)・
北沢 清(元東京農業大学助教授・樹木研究家)

社叢医セミナーの日程が決定

morimorimorimorimorimorimorimorimorimori

社叢医のインストラクター研修会の日程が下記のごとく決まりました。今回は「社叢医・入門セ

ミナー」(仮題)とし、以後、初級・中級・上級コースも検討中です。詳細は次号をご送付の折(7月)に応募要領を同封いたします。

開催期日	2003年10月18日(土)～10月21日(火)		
会場	伏見稲荷大社(京都市伏見区稲荷)		
日程	第1日(18日)	開講式	
		講義	社叢の歴史、神社の成立と社叢・わが国の照葉樹林の組成・森の記述のしかた・樹の病について等々
	第2日(19日)	実習	～伏見稲荷大社境内において～ 植物群落学的調査手法による実習・動物層調査手法による実習・土壌調査実習等々
	第3日(19日)	講義	社叢の攪乱要因と管理・緑地の拠点としての社叢・社叢の管理にまつわる法的問題等々
	第4日(18日)	実習	～京都府相楽郡山城町棚倉の湧出宮において～ 植物社会学的調査と植物生態学的調査を行ない、土壌調査をすすめる。社叢カルテ作成

※ 実習はさらに10月26日(日)と11月9日(日)の2回を予定

※ 受講料は5月中旬に決定

事務局から

- 学会誌「社叢学研究」を先月末にご送付させていただきましたが、正会員の方には5月24日(日)に東京の國學院大学で行われる「平成十五年度社叢学会総会」の出欠葉書を同封させていただきました。返送期日は5月20日となっておりますが、できるだけ早くご返送いただきたくお願い致します。
- 関西定例研究会は過去5回、大阪の社叢学会事務局を会場に開催してきましたが、第6回関西定例研究会(7月26日)から京都の伏見稲荷大社儀式殿を会場に行なうことになりました。同封の所在地図をご参照の上、多くの方々の来場をお待ちしております。
- 平成15年度の会員証を同封させていただきました。継続会員の方は前年度と同じ会員番号となっております。
- マニュアル本『森の見方・調べ方』(仮題)が、正式タイトル『身近な森の歩き方～鎮守の森探訪ガイド～』(文英堂刊)として刊行されました。

た。購入ご希望の方は事務局へお申度ください。定価(税込み)1,554円を1,400円(税込み)で頒布致します。送料は別に210円必要です。

……………訂正……………

前号2面関西定例研究会報告に間違いがありました。以下の通りご訂正ください。

右側19行目＝山籠れる→山隠れる 同＝麗し→うるはし 左5行目＝たたなづく→たたなづく 同＝なづく→なづく

……………

編集後記

ZZZZZZZ… GWにつきお昼寝中…
こらあ！ 総会前のこの忙しい時に！！ へっ！
そうかあ、総会資料つくらなきゃなあ。『身近な森の歩き方～鎮守の森探訪ガイド～』も山のように積んであるなあ。名簿も作らなきゃなあ。あ、会員証もだって。おまけに休みのはずの7月にも研究会をするってえ！ うへえ、寝る間もない…(藤岡 郁)

発行人 社叢学会事務局 〒540-0012 大阪市中央区谷町2-2-22 NSビル5階
TEL/FAX06-4790-0155 E-Mail jim@shasou.org
社叢学会関東支部 〒171-0021 豊島区西池袋2-36-1 ソフトタウン池袋1101
TEL03-5950-6507 FAX03-5950-5184 E-Mail shasou@macrovision.co.jp